

ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア年譜

大野万紀

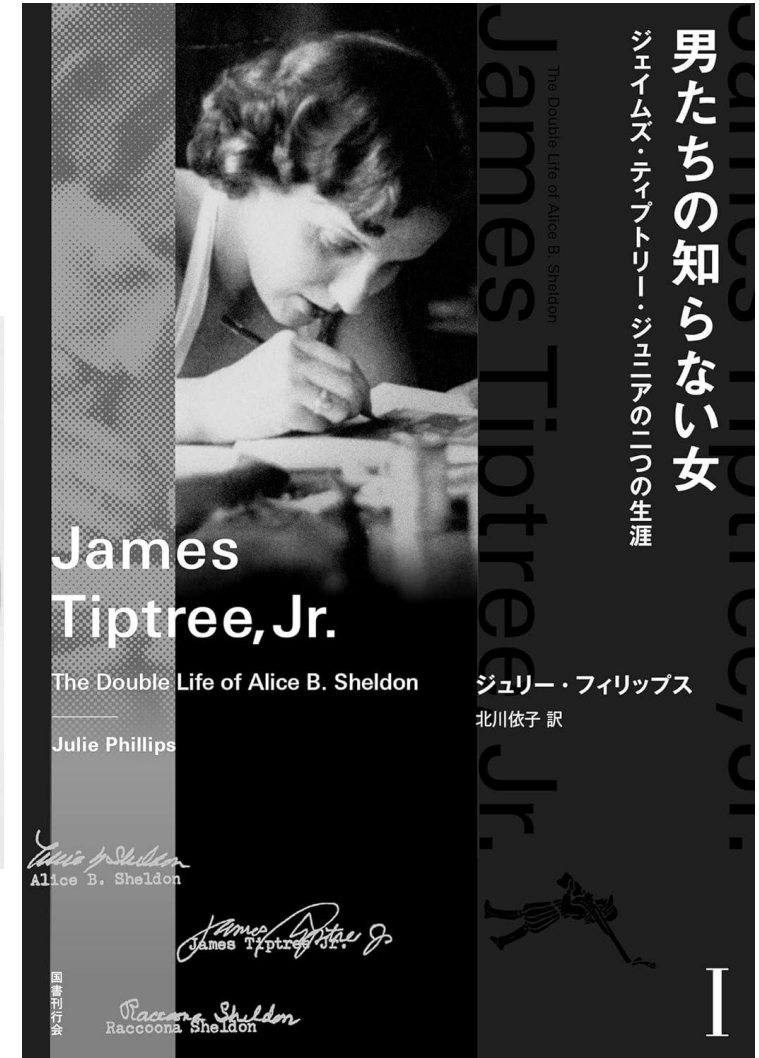
■ 誕生 アフリカ 寄宿学校

- 1915年 8月、アリス・ブラッドリーがシカゴで誕生
母は作家のメアリー・ブラッドリー
父は法律家で探検家のハーバード・ブラッドリー

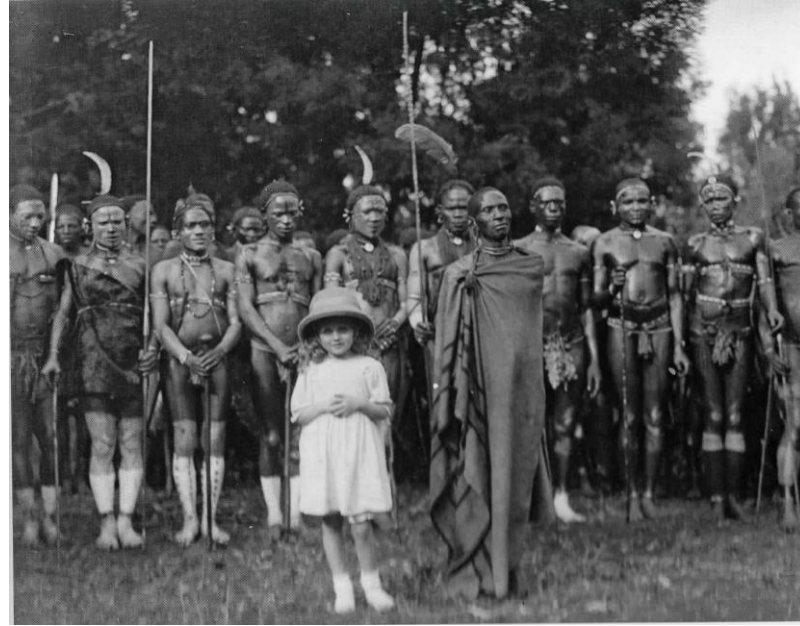
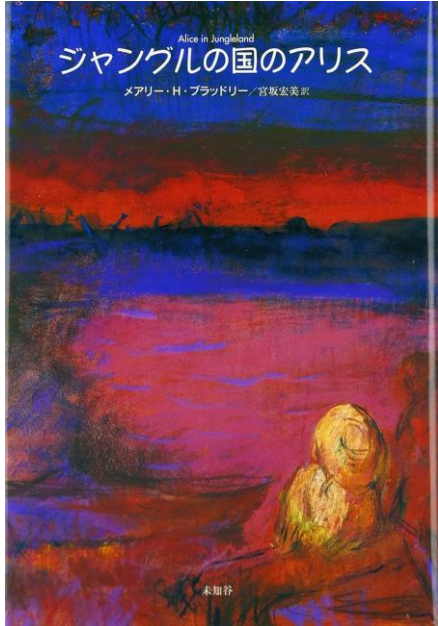
1915年は大正4年。ティプトリーといえは1970年代から活躍しているので、何となく当時のSF作家たち、ディレイニー（1942生）やエリスン（1934生）、ル＝グィン（1929生）らと同年代の印象があるが、ずっと年上なのだ。星新一が1926年（大正15年）生まれであり、アリスは日本SFの第一世代より10歳以上年長なのである。



「はいからさんが通る」のはいからさんが大正7年に17歳の設定なので、アリスのちょっと年の離れたお姉さんといったところか。



- 1921年 6歳のアリスを連れたメアリーによるアフリカ旅行
- 1924年 2度目のアフリカ旅行



イトウリの森の一部の村人にとって、ブラッドリー家の人びとははじめて目にする白人だった。それゆえ、たいていのSF作家には物語か比喻でしかない状況を、一行は現実に経験することになったすなわち異星人（エイリアン）との「はじめての接触（ファースト・コンタクト）」である（上巻 P.65）

彼女を女神のように崇拝する三十人の原住民の見守る前で平然と髪にブラシをかけていたという彼女は、しかし誰よりも鋭い感受性の持ち主であり、様々な異文化、宗教、タブー、その他との接触によって「同年代の普通の子供たちとの生活に深い疎外感を覚え、文化の相対性に悩まされる」早熟で孤独な少女となった。（大野万紀『愛はさだめ、さだめは死』解説）

• 1929年 14歳でSFとのファーストコンタクト

(父ハーバートの親友で近所に住んでいた「ハリーおじさん」は14歳になったアリスともとても親しかった)

ある夏、ハリーおじさんが注文していた文芸誌を受け取りに、地元の本屋に行った。彼が包みを抱えて戻ったとき、〈ウィアード・テイルズ〉という、安っぽい印刷の大きな雑誌が手元から落ちた。表紙には「大きな緑のタコが若い女性の金色のブラジャーを外そうとしている」絵が描かれていた。みなが目を見張った。

(これは〈ウィアード・テイルズ〉1929年2月号)

「ああ」とハリーおじさんは言った。「うむ、そうだな。これは、その、子供のために買ったんだよ」

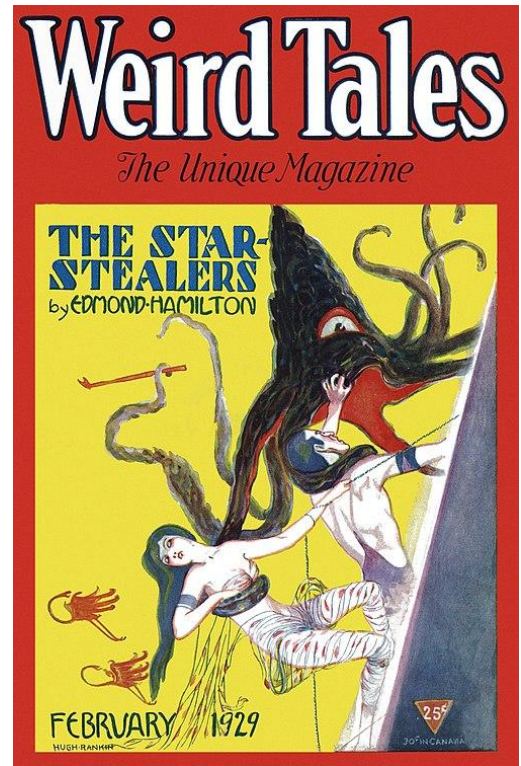
「ハリーおじさん」とわたしは目玉をぐりぐりさせて言った。「あたしは子供だよ。それ、いただける？」

それ以来、アリスとハリーおじさんの共謀は続き、ふたりは雑誌を交換したり、ラヴクラフトを読んだり、〈アメージング・ストーリーズ〉や〈ワンダー・ストーリーズ〉をはじめとする古典的なパルプ・マガジンを新たに発見したりした。(上巻P.88)

• 1929年 スイス、ローザンヌの教養学校へ

大半が年長の少女たちの中で、アリスは他の子の真似をしようと、もっと普通の女の子っぽくなろうと必死に努力したが、孤立する。みんなから「わたしは「あの子」と呼ばれていた」と言い、「故郷への帰還」を望むようになる。

(上巻P.92~105)



■ 最初の結婚と離婚 軍務とシェルドン大佐との出会い CIA勤務

• 1930年 15歳。アリス3度目のアフリカ旅行

アフリカはかつてのアフリカではなく、この旅は散々な結果に終わった。（上巻P.110）

• 1931年 ニューヨークの小さな寄宿学校へ

16歳のアリスは、とても恵まれた少女に見えた。たいそう美しく、とても虚栄心が強かった。新聞には「デュ・モーリアのヒロインのごとく」と書かれた。また思春期の彼女は男性への興味と同時に女性への恋心を抱いていた。（上巻P.113～115）

• 1933年 17歳。ニューヨークのサラ・ローレンス女子大に入学

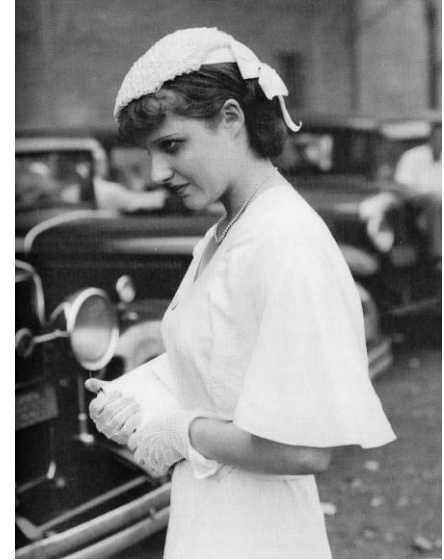
画家になろうと勉強し、学校のスター的存在となった。だがその内面は将来への展望がなく常に混乱していた。性的な面でもまた。（上巻P.150～139）

• 1934年 19歳。ウィリアム・デイヴィー（21歳）と電撃結婚

年末に母が企画した社交界へのデビューパーティ。そこでアリスに隣に座ったプリンストンの21歳の学生、ウィリアム・デイヴィーがプロポーズし、二人はパーティを逃げ出して結婚する。

（上巻P.149～171）

『愛はさだめ、さだめは死』の解説（1987）で、ぼくはチャールズ・プラットのインタビューから「三日前に知り合ったばかりのハンサムな男の子と駈落ちし、結婚する（すぐに離婚したが）」と書いたが、評伝によるとこれは正しくない。二人の両親は困惑しながらも結婚を認めたし、6年半続いたのだからすぐに離婚でもない。またビルはおバカなチャラ男でもなかった。



結婚生活で二人は両親の金を使って羽目を外し遊び回る。二人は知的で過激だった。行き当たりばったりな生活。非合法なことも体験し、危険な中絶手術を経験（後にそれで子供が産めなくなると判明）。アリスは女性であることに困惑し、男の肉体を持ち男の人生をおくりたいと思う。（上巻P 149～P171）



- **1940年 25歳。ウィリアム・デイヴィーと離婚**
- **1941年 新聞社で美術評論をする**

才能はあったが忍耐力に乏しかったアリスは画家になることを諦め、両親の家に引きこもっていたが、この年創刊された日刊紙〈シカゴ・サン〉に美術評の執筆者として雇われた。（上巻P.199）

- **1942年 27歳。陸軍女性補助部隊（WAAC）に志願し入隊**

日本との戦争が始まり、アリスはパイロットになろうと飛行学校に入学したが、視力が基準に足らなかった。彼女は発足したばかりのWAACに志願した。（上巻P.207）



- **1943年 航空隊写真情報部へ移籍**

当初のWAACはあくまで補助部隊だった。アリスは事務的な仕事に満足せず、写真解析に興味をもち志願して航空隊写真情報部へ移籍する。（上巻P.226）

- **1945年 29歳。ロンドンへの派遣 シェルドン大佐と出会う**

戦争が終わり、アリスはロンドンへ派遣され、ドイツ軍から入手した科学技術を利用するため設立された、ハンティントン・シェルドン大佐（42歳）率いる部門に配属される。（上巻P.244）

- **1945年 29歳。ハンティントン・シェルドン大佐と結婚**

(アリスが30歳になる約2ヶ月前の) 7月4日、パリのサン・ジェルマンではじめて会ってからまだ4週間もたたないうちに、ティング (ハンティントン) とアリスは結婚を決めた。(上巻P.252)

- **1945年 初めて小説が雑誌に掲載される**

ティプトリーとして書き始めるまえに出版されたアリスの唯一の短編小説は、戦後ドイツの瓦礫の町を舞台にしている。この「幸運な者たち」"The Lucky Obes"は戦時中の女性を扱う作品で、ヴィースバーデンの家で住み込みで働いていた三人の難民が題材となっている。(上巻P.260)



- **1946年 ハンティントンとアリス・シェルドン、陸軍を辞職**

- **1948年 33歳。鶏の孵化場を購入し、経営する**

戦時中に女性が達成した経済的・社会的立場の向上は、1947年までにすべて無効にされた。ティングの再就職もうまくいかず、広告にあった鶏の孵化場に興味を抱き親から借金して1948年に購入する。(上巻P.277~282)



- **1952年 37歳。このころ再びSFを読むようになる**

アリスは深夜のとおき「禁じられた道楽」として、ふたたびSFを読むようになり、自分の子どものころと比べてこのジャンルが変わったことに気づいていた。アシモフ、ブラッドベリ、メリル、コーンブルース、ハインライン、クラーク、ベスター、コードウェイナー・スミス、いわゆる50年代SFである。(上巻P.298~299)

• 1952年 赤字になった孵化場を売却 ワシントンDCに引っ越してCIAに就職

プラットのインタビューではCIAについて曖昧だがとても面白そうに盛った話が語られている。評伝では実際はもっと地味なことだったようだ。『愛はさだめ、さだめは死』の解説について、読者からCIAの設立年と話があっていないとの指摘があり、THATTA掲載版には追補を載せているが、それもティプトリーの読者の期待に応えようとする思わせぶりが原因だろう。

• 1953年 38歳。いくつかの初期の草稿をSF雑誌に送るが不採用となる

まだティプトリーの文体を確立していなかったがアン・テリーという筆名でSF短編の草稿を編集者に送った。その中には〈ギャラクシー〉のホレス・ゴールドに送った“Phalarope”というかなりいい線までいった作品もあった。それが「ティプトリーの最初の短編のひとつとして再利用されたのは15年後のことだった」（上巻P.302）とあるが、内容から「愛しのママよ帰れ」のことだろう。また「冷たい方程式」のパロディで「タイムマシンをオモチャにしないでください、あるいは、わたしはF.B.Iのために《アスタウンディング》誌のバックナンバー15924冊をズタボロにした」（SFマガジン2026年2月号）の原型となる作品もこのころ書かれた。

• 1955年 40歳。CIAを突然辞職し、数週間行方をくらます

CIAでティングは重要な役を果たすが、アリスは補助的な役に留まり、その非対称性に彼女は悩む。1955年の夏のある日、アリはティングのもとを去り、しばらく姿を消した。アリは少なくとも2週間前には職場に通知したうえでCIAを辞職した。彼女はティングのもとを離れて小さなアパートで1年足らず暮らしたけれど、行方が分からなかったのはせいぜい数週間だったはずだ。8月なかばに彼女とティングはすでに対話を始めており、結婚カウンセラーのもとに通っていた。（上巻P.326～328）

■ ネズミに残酷なことのできない心理学者 SF作家ティプトリー 第一の衝撃

- 1957年 41歳。心理学を勉強しようとアメリカン大学へ入学
- 1959年 最優秀でアメリカン大学を卒業 ジョージ・ワシントン大学へ移る

43歳で公衆衛生局の特別研究員としてジョージ・ワシントン大学へ移り、大学院で視覚心理学の研究をした。そのネズミを使った実験で、後に博士号を取得することになる。

- 1961年 父ハーバートが86歳で亡くなる

強烈な個性をもって長生きした母に比べ、評伝の中でも父の影は薄い。

- 1965年 大学で学生相手に心理学の講義をすることになる

大学院に入った後、アメリカン大学とジョージ・ワシントン大学の両方でコースを担当した。彼女は教えるという観念そのものは気に入っていた。若い人々が好きだったし、自分の子供を育てなかったことの埋め合わせとして、教育に携わっていた。だが残念ながら、実際の教育は、他の多くの現実と同様にアリを落胆させた。アリはくたくたになった。（上巻P.389）

- 1967年 博士号取得。論文執筆中に気ままにSF短編を書き始める

60年代後半、新しいSFが生まれてきた。エリスン、バラード、ディッシュ、ラス、ディレイニー、ル＝グウィン…。アリにも博士論文の執筆に睡眠時間を削っているあいだに、物語が湧いてくるようになった。今や気楽に、お遊びとして夜更かしの気ままにSFを書ける。「セールスマンの誕生」「断層」…。51歳の心理学研究者アリ・シェルドンはこれらの物語をタイプで打ち、いくつかのSF雑誌に送った。（上巻P.395～397）

• 1968年 53歳。SF作家ティプトリーのデビュー

学者としての経歴が不安定だったので、今回も偽名のもと作品を提出しようとした。このSFの仕事は完全なジョークだと示す、ばかげた名前にしたかった。アリスとティンクがジャイアント・フーズというスーパーで買い物をしていたとき、ティプトリーのジャムの瓶が彼女の目に入った。彼女が「**ジェームズ・ティプトリー**」と言い、ティンクが「**ジュニア**」と言った。（上巻P.398）

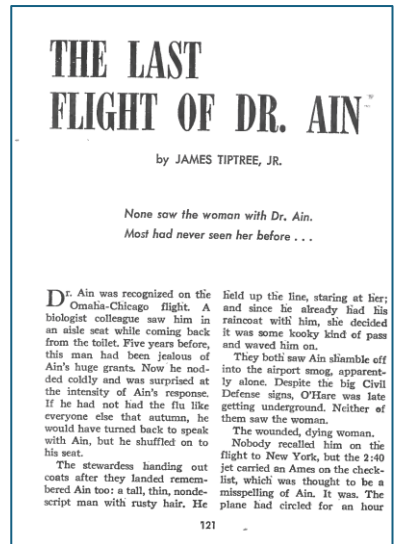
「セールスマンの誕生」「断層」「愛しのママよ帰れ」がジョン・W・キャンベル、ハリイ・ハリソン、フレデリック・ポールに採用され、まず「**セールスマンの誕生**」が〈アナログ〉68年3月号に掲載される。これがSF作家ティプトリーのデビュー作となる。

• 1969年 「エイン博士の最後の飛行」で一躍注目作家となる

「**エイン博士の最後の飛行**」が〈ギャラクシイ〉69年3月号に掲載され、高い評価を得て、一挙に注目作家となる。前年に〈スタートレック〉にはまり熱烈なファンとなって「**ビームしておくれ、ふるさとへ**」を書いたがこれも続いて〈ギャラクシイ〉に掲載される。

もともとアリスは文通魔だったが、このころにはティプトリーとして、ディックやエリソンを含む多くのSF作家や編集者とも文通を始めていた。

デイヴィッド・ジェロルドが手紙の住所からアリスの自宅を訪問するが、本人から住所違いですと追いつ返される。アリスはあわてて「ティプトリー」の私書箱を作り、住所変更届を出す（下巻P.66～P.68）このエピソードにはとてもCIAの関係者で秘密主義のアリスとは思えないくらいとぼけた味があって、笑える。



• 1970年 ティングがCIAを退職 ユカタン半島のキンタナ・ローに別荘を入手

アリは自分の生活と旅を優先して、ティプトリーをいったん横に置いた。ティングがその秋に引退し、彼らが前年に訪れたユカタン半島の土地を再訪したいと言ったのだ。（下巻P.72）

• 1971年 56歳。SF雑誌やアンソロジーに多数の傑作短編を投稿する

若いSFファン、ジェフリー・スミスとの文通がきっかけで、ティプトリーは勢いを取り戻し、多数の傑作短編を次々と世に出すようになる。1972年には「故郷へ歩いた男」「そして目覚めると、わたしはこの肌寒い丘にいた」「苦痛志向」「最後の午後に」「ハドソン・ベイ毛布よ永遠に」などが雑誌掲載され、1973年には「愛はさだめ、さだめは死」「男たちの知らない女」「接続された女」などが掲載される。**ティプトリー黄金時代の始まり**である。あまり有名とはいえない若いSFファン、ジェフリー・スミスがいたからこそ、ティプトリーがSF界で長く正気を保っていたのではないかとさえ思える。彼は本当にいい人だ。

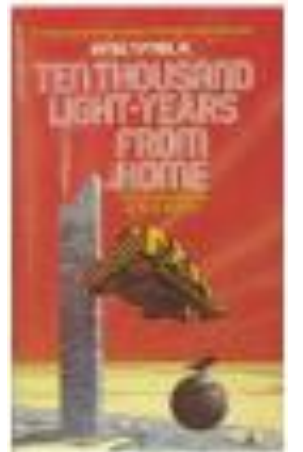


• 1973年 最初の短編集 Ten Thousand Light-Years from Home が出版される

• 1974年 「愛はさだめ、さだめは死」がネビュラ賞を受賞する

• 1974年 「接続された女」がヒューゴー賞を受賞する

ティプトリーの第一短編集 Ten Thousand Light-Years from Home は日本ではかなり遅く、1991年に『故郷から10000光年』として伊藤典夫訳で出版された（中の作品はSFマガジンにもっと前から掲載されていたが）。日本での出版は1978年の第3短編集『老いたる霊長類の星への賛歌』がサンリオから1986年に出て、1975年の第2短編集『愛はさだめ、さだめは死』がハヤカワから1987年に出ている。



• 1974年 SFマガジンに初めてティプトリーが翻訳される

SFマガジン74年3月号に「そして目覚めると、わたしはこの肌寒い丘にいた」が伊藤典夫訳でひっそりと翻訳された。これが本邦初訳のティプトリー作品である。続けて「苦痛志向」が5月号に翻訳される。

本当に目立たない紹介だったのだが、当時大学生だった水鏡子やぼくはそれを読んで衝撃を受けた。水鏡子は「そして目覚めると～」をSF研で絶賛し、ぼくも読んだのだが、その時はすごいとは思ったけれどあまりぴんと来なかった。でも「苦痛志向」には目を見張った。洋書屋を探して Ten Thousand Light-Years from Home を入手し、読みふけた。そしてその中から何編かを翻訳し、それを翌年のSF研究会誌『最後のれべる鳥賊』（75年4月）に掲載して、調子に乗ってティプトリー論まで書いてしまったのだった。

これがぼくらにとっての**ティプトリー第一の衝撃**だった。ほとんど短編集1冊だけの情報から書いたものだから、笑えるところも多い。ただサンリオ版『老いたる霊長類の星への賛歌』の鳥居定夫（水鏡子）解説に引用されているように、今読んでも結構いい線いっていたように思う。

彼が常にもとめつづけているのは安らぎの場としての「故郷」である。それはけっして手に入らないものなのだ。彼の作品に見られる「望郷」の念は、彼自身が幼いころから世界を飛び回っていて、故郷をもたないことによるのかもしれない。また「ホーム」とか「マザー」とか「ミルク」とかいった言葉がやたらくりかえされることから、彼の内面にある種のコンプレックスを見ることができるとも思われる。もっとも、知らないことはあまり言わない方がいい。（大野万紀）



• 1975年 第2短編集 Warm Worlds and Otherwise 出版

邦訳『愛はさだめ、さだめは死』ハヤカワSF文庫 1987 訳：伊藤典夫・浅倉久志 解説：大野万紀

• 1976年 「ヒューストン、ヒューストン聞こえるか」 ヒューゴー、ネビュラ両賞受賞

■ 母の死 第二の衝撃 ティプトリーは女性だった！

• 1976年 母メアリー死去（94歳）

• 1977年 62歳。ティプトリーがアリス・シュルドンであることが曝露される

このニュースのメアリーの経歴がティプトリーの書いたものと酷似していたことから、SF界で噂が広がり、ティプトリーの真実が暴かれることになる。

ティプトリーの正体が曝露される前、ティプトリーはアーシュラ・ル＝グウィン、ジョアンナ・ラス、ヴォンダ・マッキンタイアらの女性作家たちと親密な手紙のやりとりを続けていた。しかし、それらは男性作家ティプトリーとして書かれていたため、フェミニズムの観点でラスから批判を浴びるなど、しだいに自らの性的アイデンティティの分裂に悩むようになる。ティプトリーは男女は生物学的に別の存在であると考えており（そういう研究書を書こうとしていた）、社会的ジェンダーを重視するフェミニストからは女性に理解はあるがやはり保守的な男性と見えていた。アリスはもう一人の女性人格としてラクーナ・シュルドンを作り出したが（「ラセンウジバエ解決法」までは）あまり評価されなかった（下巻P110～124、P131～150、P158～164、P179～203）

- 1977年 「ラセンウジバエ解決法」 (ラクーナ・シェルドン名義) ネビュラ賞受賞
- 1983年 チャールズ・プラットによるティプトリー・インタビュー掲載

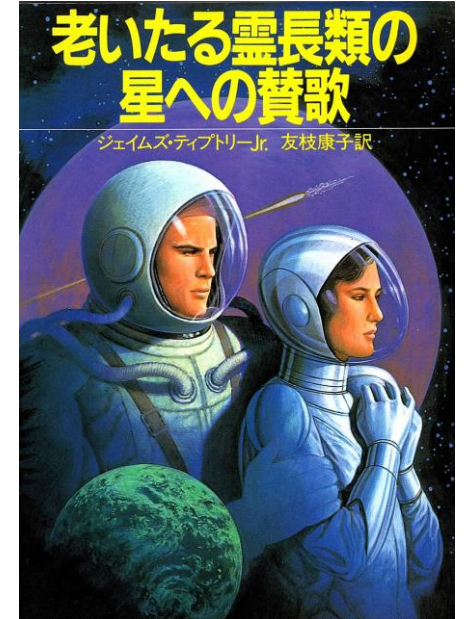
チャールズ・プラットのインタビュー集 Dream Makers 2 に掲載されたインタビューにより、ティプトリーの子供時代からの驚くべき経歴が明らかにされる。大野万紀の文庫解説「センス・オブ・ワンダーランドのアリス」も鳥居定夫の文庫解説「ティプトリー・ファイル」もこのインタビューを主な情報源としていた。この経歴の公開こそ、ティプトリー**第二・五度目の衝撃**といえるものだった。

- 1985年 「たったひとつの冴えたやりかた」 ローカス賞受賞
- 1986年 『老いたる霊長類の星への賛歌』 邦訳

「たったひとつの冴えたやりかた」“The Only Neat Thing to Do”は〈F & SF〉誌1985年10月号に掲載された。

このころは暗い、深刻な話が多かっただけに、この14歳のアリス自身が主人公のようなSF愛に満ちた物語には驚いた。だがヒロインと異星人の関係にはアリスとティプトリーの相反する関係性を見て取ることもできるだろう。

『老いたる霊長類の星への賛歌』はティプトリーの第3短編集 Star Songs of an Old Primate 1978 の邦訳 訳：友枝康子 解説：鳥居定夫 (水鏡子) サンリオSF文庫 これがわが国で最初に出たティプトリーの短編集である。



- 1987年 『すべてのまぼろしはキンタナ・ローの海に消えた』
世界幻想文学大賞短編集部門受賞

■ 夫の殺害と自殺 ティプトリー第三の衝撃

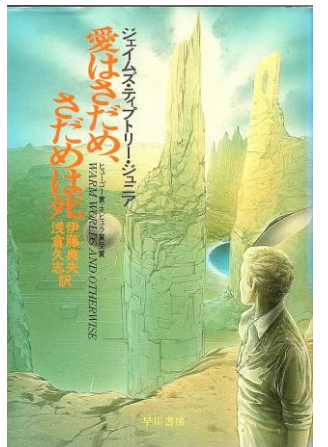
• 1987年 71歳。84歳の夫を射殺し、自殺

5月18日の夜11時半ごろ、アリは弁護士に電話をかけ、夫を殺して自殺するつもりだと話す。夫婦のあいだで自殺の合意はできていると、とても冷静に説明した。弁護士は警察に電話した。警察は現場に向かったが、夜中の1時には全て解決したと行って帰っていった。だがまた3時にアリから弁護士に電話があり、この手で夫を殺したので、これから自分の命を絶ちますと話した。警察が再び現場に行った時には二人ともベッドの上で死亡していた。アリはティングの手を握っていた。ティングは84歳、アリは71歳だった。（下巻P.354～355）

関係者の証言によると、ティングは二人が年を取りすぎて健康に生きられなくなったらアリと一緒に死ぬと約束したものの、まだ目が見えなくなっただけで、死ぬ覚悟はできていなかったのではないかと言う。心中というより無理心中だった可能性も残る。アリが当時かなり不安定な精神状態だったことは確かなようだ。

• 1987年 『愛はさだめ、さだめは死』 邦訳

『愛はさだめ、さだめは死』はティプトリーの第2短編集 Warm Worlds and Otherwise 1975 の邦訳 訳：伊藤典夫・浅倉久志 解説：大野万紀 ハヤカワ文庫SF ぼくの解説にはプラットのインタビューをもとにしたティプトリーの生涯とともに、ネット（当時はパソコン通信）で飛び交った生々しい死の衝撃を書き留めている。



• 1987年 チャールズ・プラットのインタビュー邦訳

チャールズ・プラット「ジェームズ・ティプトリー・ジュニア・インタビュー」がSFマガジン10月号に翻訳、掲載された。翻訳：浅倉久志

• 1987年 『たったひとつの冴えたやりかた』 邦訳

『たったひとつの冴えたやりかた』は連作短編集 The Starry Rift 1986 の邦訳
翻訳：浅倉久志 ハヤカワ文庫SF

ティプトリーの翻訳書で、現在書店で入手可能なのはこれ1冊になってしまった。これはもちろん人気の高い素晴らしい短編集だが、ぜひ他の短編集も再刊してほしい。表題作は1989年の星雲賞海外短編部門受賞。オールタイムベストの常連でもある。

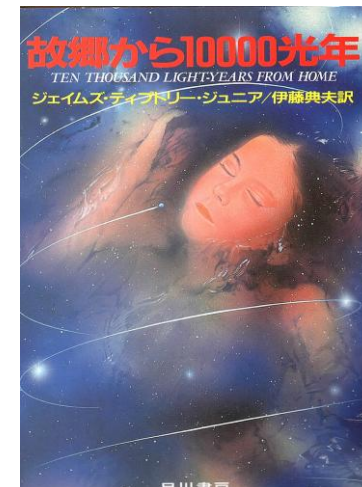
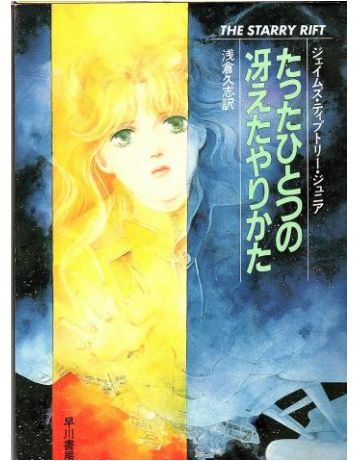
• 1991年 『故郷から10000光年』 邦訳

『故郷から10000光年』は第一短編集 Ten Thousand Light-years from Home 1973 の邦訳。翻訳：伊藤典夫 解説：伊藤典夫 ハヤカワ文庫SF

• 1999年 『星ぼしの荒野から』 邦訳

『星ぼしの荒野から』は Out of the Everywhere and Other Extraordinary Visions 1981 の邦訳。翻訳：伊藤典夫・浅倉久志
解説：伊藤典夫 ハヤカワ文庫SF

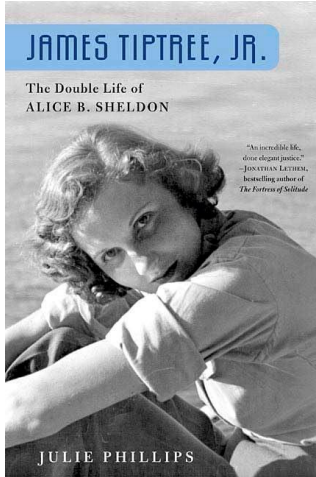
ラクーナ・シェルドン名義の作品を含む短編集である。表題作は2000年の星雲賞海外短篇部門受賞。



• 2004年 『すべてのまぼろしはキンタナ・ローの海に消えた』 邦訳

『すべてのまぼろしはキンタナ・ローの海に消えた』は Tales of the Quintana Roo 1986 の邦訳。翻訳：浅倉久志 解説：越川芳明 ハヤカワ文庫FT

• 2006年 ジュリー・フィリップスがティプトリーの伝記
James Tiptree, Jr.: The Double Life of Alice B. Sheldon を出版

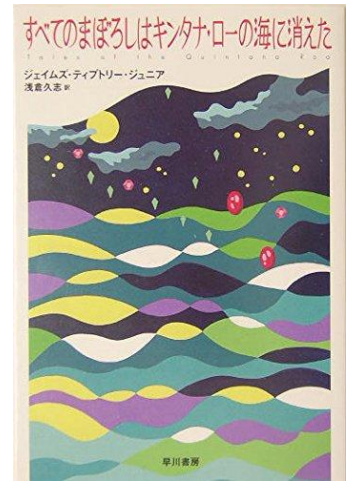


この極めて詳細に調査されたティプトリーの評伝によって、これまで知られていなかった彼女の生涯が具体的かつ鮮やかに明らかにされた。ぼくも原書が出版されるとさっそく入手して読んだのだが、まずはそれまで基本文献としていたプラットのインタビューが、基本的には正しいもののティプトリーによってかなり脚色されたものだったことがわかり驚いた。またアリスのセクシャリティの問題にまで深く踏み込んでいることや、SF作家や編集者との頻繁な書簡のやりとりがとても興味深かった。本書は2007年のヒューゴー賞、ローカス賞を受賞している。これをティプトリー **第三・五度目の衝撃** といってもいいだろう。

• 2007年 『輝くもの天より墜ち』 邦訳

『輝くもの天より墜ち』はティプトリーの長編、Brightness Falls from the Air 1984 の邦訳。翻訳：浅倉久志 解説：浅倉久志 ハヤカワ文庫SF

ティプトリーには2冊の長編があるが、邦訳されたのはこれだけである。2008年の星雲賞海外長編部門受賞。

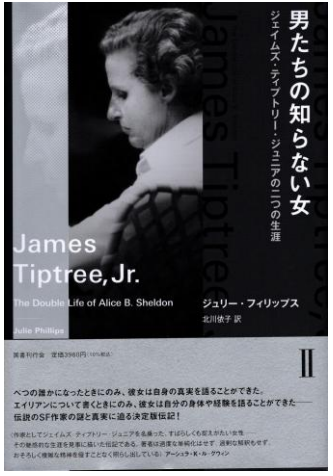
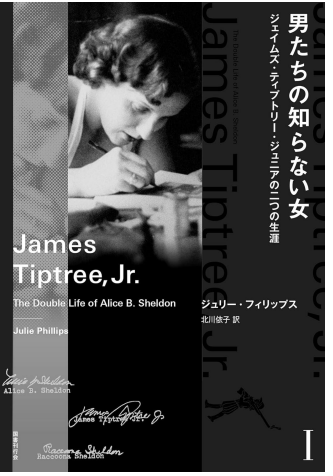


・ 2016年 『あまたの星、宝冠のごとく』 邦訳

『あまたの星、宝冠のごとく』は、死後に出版された短編集 Crown of Stars 1988 の邦訳。翻訳：伊藤典夫・小野田和子 解説：小谷真理 ハヤカワ文庫SF 収録作の「もどれ、過去へもどれ」が2017年の星雲賞海外短篇部門を受賞している。



・ 2026年 ジュリー・フィリップス『男たちの知らない女 ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアの二つの生涯』 邦訳



ジュリー・フィリップスの James Tiptree, Jr.: The Double Life of Alice B. Sheldon 2006 の邦訳。
翻訳：北川依子 国書刊行会
ティプトリーについての決定版というべき評伝、ジュリー・フィリップスの評伝が北川依子さんの素晴らしい翻訳で訳された。とりわけ男性としてのティプトリー、女性としてのアリスの日本語での訳し分けが素晴らしい。

■補足
・この資料でのティプトリーの写真は全て『男たちの知らない女』および『ジャングルの国のアリス』から引用したものである。資料に収めるためサイズ変更やトリミングなどの加工をおこなっている。
・『男たちの知らない女』から引用した文書は青色で記したが、文字通りではなく大野万紀による要約を含み、文責は大野万紀にある。なおページ番号はおよそこの辺りに書かれていたという目安を示すものである。 17